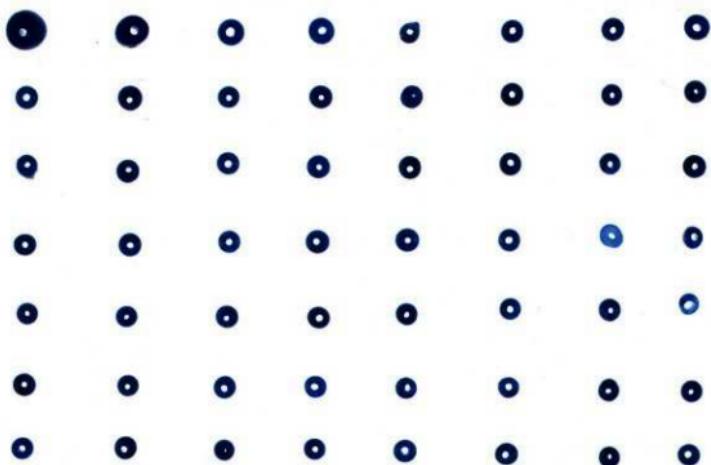


院内東横穴墓調査報告

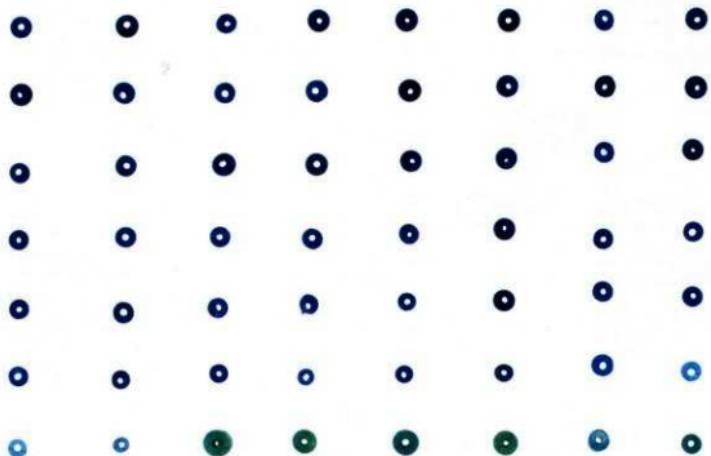
—— 平成7年度 小矢部川水系院内大谷砂防改良工事に伴う調査 ——

1998年3月

高岡市教育委員会



1. ガラス小玉



2. ガラス小玉

序

高岡市街地の北方に位置する二上山は、古来より神々の住まう山として仰がれてきました。万葉集にもこの山をめぐって多くの歌が詠まれています。この山丘の北側には国指定史跡桜谷古墳群が氷見平野や富山湾を臨んで立地しています。東側は越中國府跡や越中郡分守跡を載せる伏木台地で、眼下にはかつての射水川、現在の小矢部川、庄川が流れています。

一方、二上山の南麓は幾つかの歴史の道が行き交う交通の要所であり、二上神を祭っている射水神社の所在地でもあります。古墳群等の遺跡も多い所です。

平成7年度に、二上山南麓の谷の1つ、院内の谷の崖面の工事中に、横穴墓が発見されました。これを院内東横穴墓と命名し、緊急に調査を実施しました。その成果をまとめたものが本書です。この横穴墓からは、鉄刀、刀子、金環、ガラス小玉等の副葬品が発見され、飛鳥時代の横穴墓であることが判明しました。

最後になりましたが、この調査に御協力頂きました、関係各位、地元の皆様に感謝の意を表します。

平成10年3月

高岡市教育委員会

教育長 細呂木 六良

例 言

1. 本書は、小矢部川水系院内大谷砂防改良工事に伴なう、院内東横穴墓発掘調査の報告書である。
2. 当調査は、富山県高岡土木事務所の委託を受け、高岡市教育委員会文化財課が実施した。
3. 調査地区は、富山県高岡市二上院内である。
4. 発掘調査は、平成7年9月4日から同年12月22日までである。なお、周辺地区的試掘調査を、平成8年10月17日から同年11月15日まで実施した。
5. 報告書作成者は、平成9年度事業として実施した。
6. 調査関係者は次のとおりである。
文化財課長；田村晴彦
〔埋蔵文化財係〕
主幹兼係長；石浦正造
係員；山口友一、根津明義
荒井隆、太田浩司
7. 本書の執筆は、山口が担当した。

調査参加者名簿

発掘

尾山久美子、杉本広政、旅剛、寺井久子、道谷美奈子、中村恭子、広沢隆太郎、前田武蔵、宮下奈津子
整理

大田欣和、岡田一広、木原和美、京田直子、小島善雄、小林央、新谷晴紀子、杉村いく子、高田えみ子
橋元公子、田辺幸代、谷内桜子、寺井久子、道谷美奈子、西本真由美、苗田朋江、萩原京、幡薙

針原美佳、福澤雪、放生千絵、三島幸代

事務

片岡千賀子

高岡市埋藏文化財調査報告第2冊
院内東横穴墓調査報告

目 次

序	
例言	
目次	
第1章 序 説	1
第1節 遺跡概観	1
第2節 調査概観	7
第2章 遺 跡	12
第1節 遺構	12
第2節 遺物	15
第3章 総 括	22

挿 図 目 次

第1図 遺跡位置図〔1〕(1/15万)	2
第2図 遺跡位置図〔2〕(1/5万)	3
第3図 遺跡地図〔1〕(1/1万5千)	4
第4図 遺跡地図〔2〕(1/1万5千)	5
第5図 工事区域位置図(1/7,500)	7
第6図 調査地区位置図(1/5,000)	8
第7図 調査地区詳細図(1/1,000)	10
第8図 遺構位置図(1/200)	11
第9図 遺構全体図(1/40)	13
第10図 遺物出土位置図(1/20)	14
第11図 須恵器実測図(1/3)	15
第12図 鉄製品、銅製品実測図(1/2)	16
第13図 ガラス小玉実測図〔1〕(実大)	18
第14図 ガラス小玉実測図〔2〕(実大)	19

挿 表 目 次

第1表 ガラス小玉一覧表〔1〕	20
第2表 ガラス小玉一覧表〔2〕	21

卷 首 図 版 目 次

卷首図版 遺物 1. ガラス小玉

2. ガラス小玉

図 版 目 次

- 図版1 遺跡 1. 遺跡遠景、現況（北西）
2. 遺跡遠景、現況（南）
- 図版2 遺跡 1. 遺跡遠景、発見時（西）
2. 遺跡遠景、発見時（西）
3. 遺跡遠景、発見時（南）
- 図版3 遺跡 1. 遺跡前の旗帜、発見時（北東）
2. 横穴墓全景、発見時（北西）
3. 横穴墓全景、発見時（西）
- 図版4 遺跡 1. 遺跡全景、調査開始時（南）
2. 萬葉風景、調査開始時（南西）
3. 調査風景、調査開始時（北）
- 図版5 遺跡 1. 遺跡全景、調査再開時（南西）
2. 調査風景（北西）
3. 調査風景（北西）
- 図版6 遺跡 1. 遺跡遠景、調査終了時（西）
2. 遺跡遠景、調査終了時（北西）
- 図版7 遺構 1. 横穴墓全景（北西）
2. 横穴墓全景（北）
- 図版8 遺構 1. 横穴墓近景（北西）
2. 横穴墓近景（北西）
- 図版9 遺構 1. 玄室左壁幅近景（北西）
2. 玄室右壁幅近景（北西）
- 図版10 遺構 1. 頸済器高杯出土状態（南）
2. 頸済器高杯出土状態（南）
- 図版11 遺構 1. 頸済器高杯出土状態（東）
2. 頸済器高杯出土状態（北東）

図版12 遺物 1. 直刀出土状態（北西）

2. 直刀出土状態（北東）

図版13 遺物 1. 須恵器高杯、刀子出土状態（南）

2. 須恵器高杯、刀子出土状態（西）

3. 刀子出土状態（西）

図版14 遺物 1. 直刀、刀子、須恵器高杯出土状態（東）

2. 直刀、刀子、須恵器高杯出土状態（北東）

3. 須恵器高杯出土状態（東）

図版15 遺物 須恵器、鉄製品、銅製品

図版16 遺物 1. ガラス小玉

2. ガラス小玉

第1章 序 説

第1節 遺跡概観

1. 環境

旧二上村

当遺跡の所在する二上地区は、高岡市の現行大字で二上村に所属していた。旧二上村に該当する地域は、高岡市の北部地域で、山と川とに挟まれた所である。北側には二上山が聳え、西側から、南側を経て東側へは、小矢部川が曲流している。明治22年に成立した二上村は、二上、下八ヶ新、守護町、南八ヶ新、守護町新、渡り、二上新の7か村が合併したもので、7つの大字を構成していた。大正6年には掛間発村の大字城光寺を加えている。二上と城光寺が二上山南麓近くに立地しているのに対して、他の地区は小矢部川寄りに立地している。二上地区は二上山の南山麓で、二上、下二上、谷内、院内の4つの集落から構成されている。二上、谷内、院内は、二上山南麓の裾部に沿って西側から、東側に展開している。下二上は、山麓よりやや離れて平野部側に立地している。

二上院内

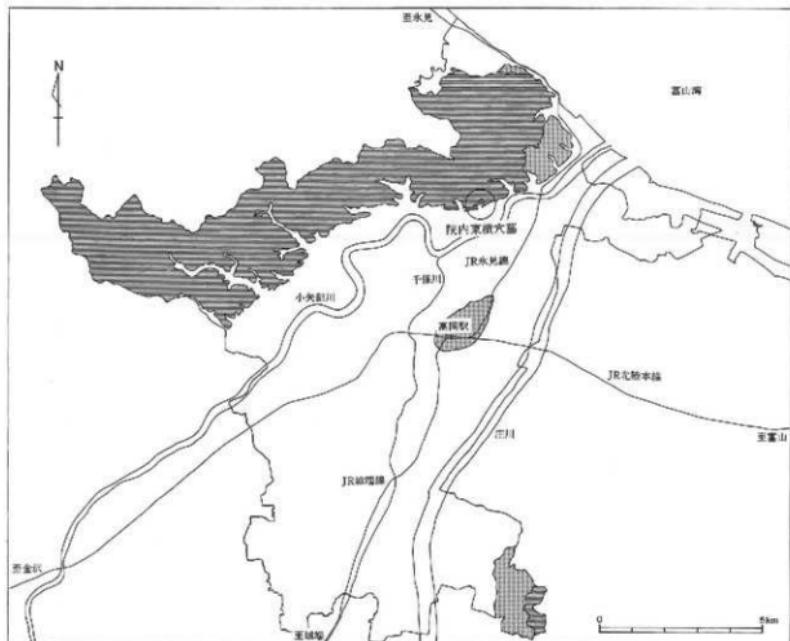
院内ないし二上院内と呼ばれている所は、二上山南麓の谷部でも東側の地区である。この地区的さらに東側は大正6年に旧二上村に編入された城光寺地区である。城光寺地区には今、市のスポーツ施設や二上露園がある。院内地区には昭和37年に用地が造成され山園町と称されている。院内の谷部は樹枝状に3つの部分に分かれしており、特に東側の谷が深いものである。東側の二上露園を載せる台地とは、急斜面となっている。ここが「院内大谷」とも称されている所である。

二上山

高岡市の北側に位置する二上山は、主峰（東峰、奥の御前）が274m、西峰（城山）が259mを計り、さらに北側の大師ヶ岳（254m）や東側の鉢伏山（211m）などの峰々がある。これらを中心に南北3.5km、東西4.5kmの山塊である。富山と石川の県境北側は宝達丘陵が発達しているが、ここから南東側へ派生する右動丘陵（西砺波丘陵）や高岡市の西山丘陵の続ぎが、二上丘陵・二上山塊である。ただし二上丘陵の西側は海老坂断層となり、西山丘陵とは区画され、二上丘陵が独立した景観となっている。この海老坂断層の所が標高約60mの海老坂峠であり、高岡と水見とを結んでかつての水見往来、現在では国道160号線が通っている。二上山の北東側は富山湾に臨み、東側は伏木台地を経て小矢部川、庄川へと続く。南側は二上地区的平野である。また北西側には上田子台地があり、水見平野へと続いている。二上山は東北東に主軸を取るドーム状構造をもち、主体となる地層は新生代中新世及び鮮新世である。そして周辺を第四紀の地層が取り巻いている。二上山の南麓に認められるのが城光寺泥岩層である。西側の谷内集落のある谷から東側の城光寺付近まで見られる。二上山の東方一帯には射水平野が拡がり、この平野部からは眺望を遮るものなく、かつ山容が秀麗なため、古来から人々に親しまれてきた山である。

二上神

二上山に宿っているとされる神が二上神である。二上神は、宝亀11年（780年）に従五位下に除せられたことが『続日本紀』に見えるのを始め、六国史などに6回見える。貞觀元年（869年）には正三位に登っている（『三代実録』）。その後の記録などには二上神の名は乏しくなるが、二上神への祭りは古代以来続いている。『延喜式』神名帳には、射水神社の記載がある。この神社に該当するものではなく、二上神社の記載が見られないことや、おりから式内社への関心のたかまりから、射水神社を二上神に比定する見解が現れ、近世から近代にかけて定着していった。明治4年には、二上神社は式内社の射水神社とされ、さらに明治8年には、高岡市街地の中心部の古城公園内に移された。そして二上山南麓の二上神社は射水神社の分社となつた。戦後になり二上神社は独立し、越中船社射水神社と称されるようになり今日に至っている。『延喜式』の射水神社を二上神にする見解が通説であるが、射水神社と二上神を別のものとする見解も提出されており、検討を要する問題である。いずれにしろ、二上神や二上神社の祭りは、二上山の神に対する古代の信仰に由来しているものといえる。



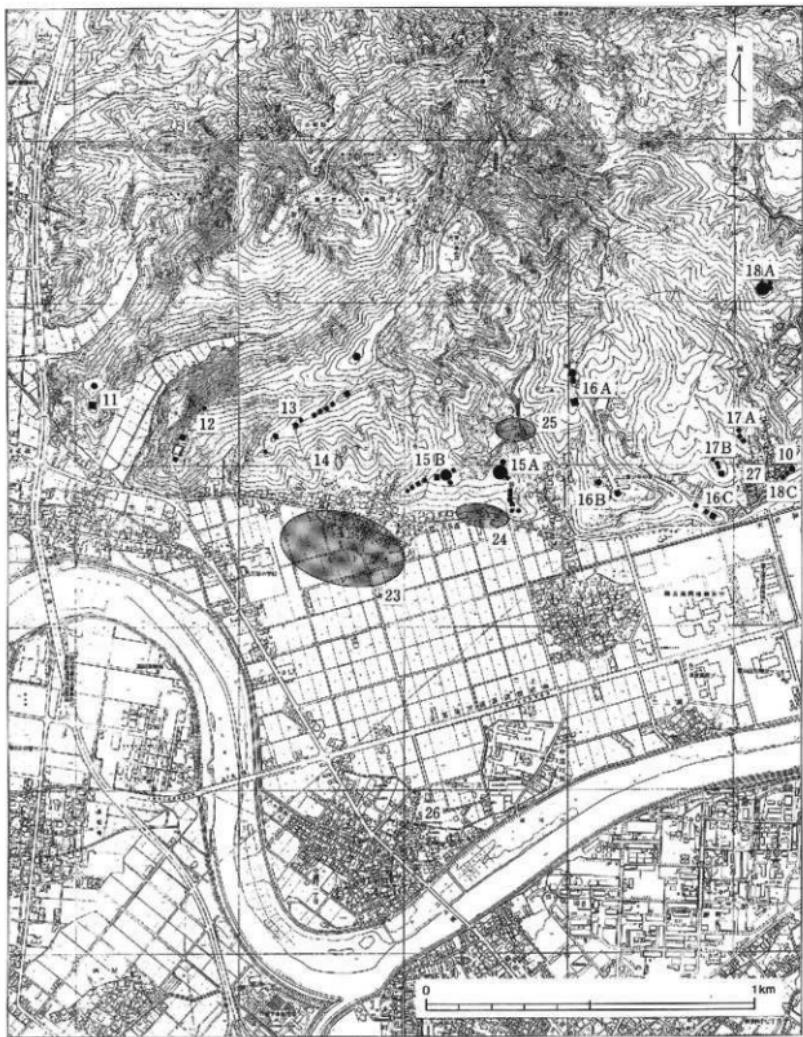
第1図 遺跡位置図 [1] (1/15万)



第2図 進跡位置図〔2〕(1/5万)

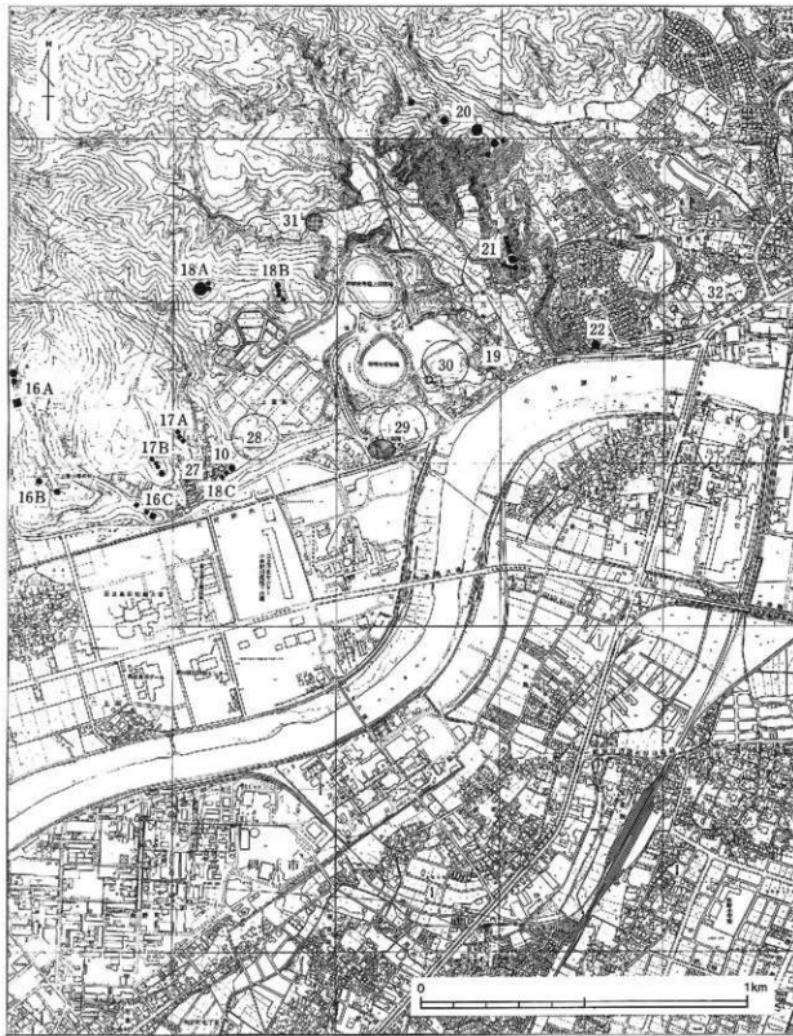
交通路と歴史的施設

旧二上村の南側の対岸すなわち小矢部川の右岸は、かつての庄川の本流であった千保川の合流地点であり、川船の運送を支配した木町が位置している。ここに渡船で結んでいたのが、「渡り」であり、小矢部川左岸地区と高岡とを結んでいた。古代北陸道は小矢部川左岸、西山丘陵の裾部を進み二上地域に達する。小矢部川を渡河せずに、このまま北東方向へ約4km進むと越中国府に達する。駅舎としては、小矢部川左岸の川人駅から日理駅を経て、右岸の白城駅を結んでいたとされる。駅路が国府に通じる必要性がないとの考え方や、地名、考古資料、効率的な交通路設定等から、日理駅の所在地を二上地内とし、こより小矢部川を渡河したルートが指摘されている。鎌倉時代の守護所は小矢部川最下流部の右岸、新潟市放生津に営まれ、その後も守護代の拠点となり、館や城が設置されている。渡り（渡り村）の東側に位置しているのが守護町（守護町村）である。この名称の由来について、南北朝時代に越中守護であった斯波氏の居館があったことによる伝えられている。氷見方面とは二上地域の北西側、海老坂越えの氷見往来があるが、近世以前には二上山南麓を廻り伏木方面へ向い、二上山の北側をう回して海岸沿いを進む道が中心であったとされる。このように二上地域は、古代以来いくつかの交通路の要所となってきた地域である。



第3図　遺跡地図 [1] (1/1万5千)

10. 施内東側穴墓、11. 東海老坂ダイラ古墳群、12. 東能老坂ムカイ古墳群、13. 二上古墳群、14. 二山側穴墓群、
15A. 谷内古墳群A支群、15B. 谷内古墳群B支群、16A. 鳥越古墳群A支群、16B. 鳥越古墳群B支群、
16C. 鳥越古墳群C支群、17A. 施内古墳群A支群、17B. 施内古墳群B支群、18A. 城光寺古墳群A支群、
18C. 城光寺古墳群C支群、23. 上二上東道路、24. 上二上東道路、25. 谷内道路、26. 守瀬町道路、27. 山岡町道路



第4図 遺跡地図〔2〕(1/1万5千)

- 10. 鶴内東横穴墓、16A. 鳥道古墳群A支群、16B. 鳥道古墳群B支群、16C. 鳥道古墳群C支群、17A. 鶴内古墳群A支群、
17B. 鶴内古墳群B支群、18A. 城光寺古墳群A支群、18B. 城光寺古墳群B支群、18C. 城光寺古墳群C支群、
19. 寺山古墳群、20. 草上野Ⅰ古墳群、21. 東上野Ⅱ古墳群、22. 矢田上野古墳群、27. 山面町遺跡、28. 城光寺平子遺跡、
29. 城光寺表上野遺跡、30. 城光寺上野遺跡、31. 城光寺通跡、32. 高美町遺跡

2. 遺跡の分布状態

院内の谷をめぐる遺跡

院内の谷部では、宅地化された時土器類が出土しており、現在も土師器、須恵器、珠洲等が採集される。山岡町遺跡と称している。この谷部を取り囲むように丘陵尾部が4条延びてきている。それぞれの尾根上には古墳群がある。西側の丘陵尾部には鳥越古墳群C支群がある。「県立二上青少年の家」が立地する鳥越台地から東南東方向へ派生してきた部分である。前方後方墳1基と方墳2基からなっている。北西側の丘陵尾部には院内古墳群B支群がある。円墳4基からなっている。北側の丘陵尾部には院内古墳群A支群がある。古城公園にある射水神社の摂社である院内社の背後に方墳が4基ある。東北東側の丘陵尾部には城光寺古墳群C支群がある。「上塙園のある台地から西南西へ派生してきた丘陵上である。円墳1基と方墳2基からなっている。平成4年には、院内社の参道工事中に「中世地下式塚」が確認され、発掘調査を実施した。

二上山南麓の古墳群

院内の谷周辺以外の二上山南麓にも古墳群が分布している。院内の西側からみていく。二上山の南西側山麓、海老坂幹を越え永見市へと向かう国道160号線付近の東海老坂地区には、東海老坂ダイラ古墳群と東海老坂ムカイ古墳群とが立地している。前者は円墳と方墳状のものと円墳状のものそれぞれ1基づくからなっている。後者は前方後方墳1基があり、さらに郭遺構や古墳状のものもある。東海老坂地区の東側、上二上集落の北側の尾根上の古墳群が二上古墳群である。最上部には古墳を再利用したとされる二上経塚があり、ここから南西方向へ前方後方墳1基、方墳4基、円墳4基が連なっている。上二上集落の東側には谷内集落がある。この間の台地とその周辺に2つの古墳群がある。西側の谷内B古墳群と東側の谷内A古墳群である。それぞれ円墳2基と方墳4基、そして円墳5基と方墳4基である。谷内集落の東側には鳥越台地がある。先に述べた鳥越古墳群C支群以外に、鳥越古墳群A支群とB支群がある。A支群は円墳2基と方墳1基である。B支群は円墳2基と方墳状のもの2基である。

院内の東側の古墳群をみていく。院内の東側には二上塙園のある台地がある。この塙園の背後の丘陵尾根上に城光寺古墳群のA・B支群がある。西側のA支群は円墳3基と塙園1町のため消滅した円墳1基からなっている。東側のB支群は円墳4基からなっている。二上塙園の東側には市営城光寺球場と隣上競技場とがある台地で、これの東側は城光寺谷となっている。この台地は守山と呼ばれており、5基以上の古墳が存在したが、土取りにより消滅した。守山古墳群である。城光寺谷の北東側、城光寺集落の背後の丘陵尾根上に東上野Ⅱ古墳群がある。円墳5基と方墳4基である。この古墳群のさらに奥側には東上野Ⅰ古墳群がある。前方後方墳1基、円墳3基、方墳2基からなっている。1号墳の前方後方墳は長さ34mを計る古式のものである。城光寺集落の東側の台地は、宅地造成がなされ高美町と呼ばれている。この付近にかつて存在したのが矢田上野古墳群である。11基以上の古墳が存在したとされている。馬具を出土した古墳もある。

二上横穴墓群

二上山周辺に所在するものとして從来より知られてきた唯一の横穴墓が二上横穴墓群である。二上山南麓の上二上集落にある金光院の背後にある。標高40~50mの東側斜面に4基の横穴墓が開口している。泥岩質の地山に構築されている。1基は澳門を残している。

集落跡等

二上山南麓の平野部には、集落跡等の一般包蔵地も所在している。山麓近くには、上二上遺跡、上二上東遺跡、谷内遺跡等があり、小矢部川寄りの守護町にも遺物の散布が認められる。

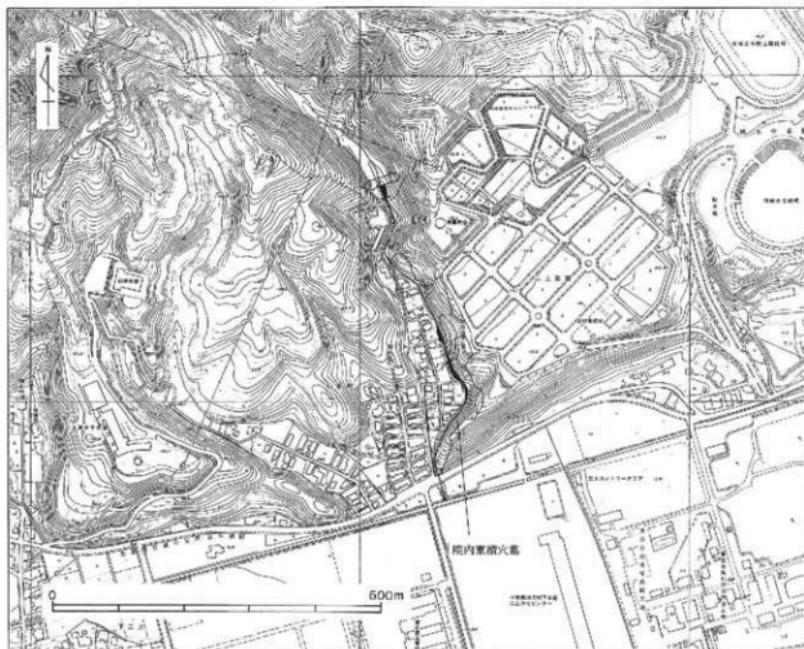
第2節 調査概観

1. 調査に至る経緯

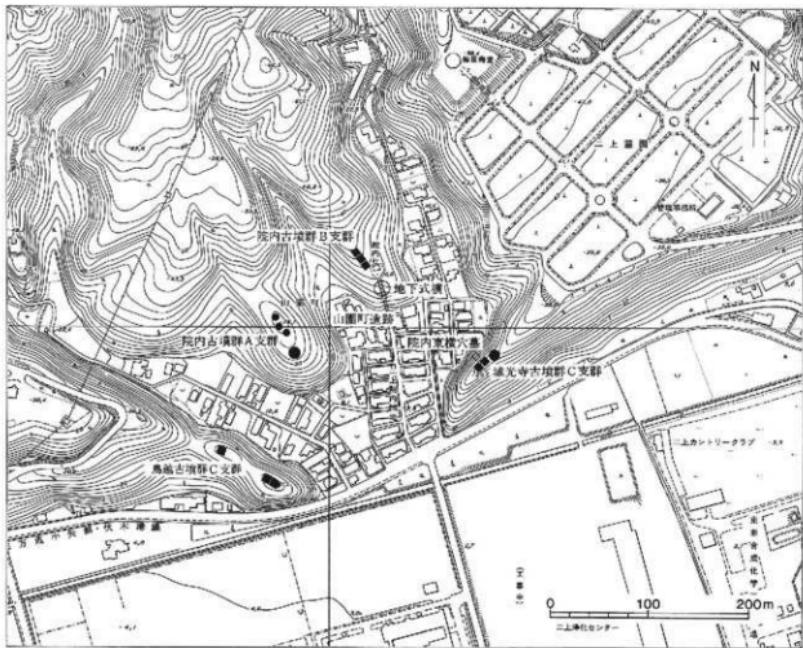
工事計画と協議

院内大谷は小矢部川の支流大井川に流れ込む流域面積0.12km²の溪流である。当流域では集中豪雨により土石流の発生する恐れがあり、下流部に密集する人家等に及ぼす土石災害は甚大なものと予想された。そこで被害を未然に防止するため、砂防ダム及び流路工の建設が計画された。工事計画では、砂防ダム1基と流路工事 530mが計画された。流路工部分は砂防ダム建設のための工事用道路として建設され、ダム建設後に流路工として整備されるものであった。また溪流の左岸は急斜面となり崩壊防止のためのコンクリート擁壁工事も計画されていた。

この工事計画における埋蔵文化財保護上の課題は2つあった。1つは擁壁工事により城光寺古墳群C支群



第5図 工事区域位置図(1/7,500)



第6図 調査地区位置図（1／5,000）

が掘削を受けることであった。もう1つは工事計画区域の院内の谷部と付近の丘陵部は埋蔵文化財が多く、現在判明している以外にも、未確認の埋蔵文化財が包蔵されている可能性があることであった。

開発側の県高岡土木事務所、市の担当部局の建設部土木維持課、県埋蔵文化財センター、市の社会教育課との協議が行われた。埋蔵文化財保護側から開発側に対して、古墳の保護については以下のように申し入れ現地確認等も行った。

1. 本来埋蔵文化財は、現状で保護すべきもので、開発工事はこれを避けて計画し、実施してほしい。
2. 工事のためやむを得ず埋蔵文化財が破壊される場合、記録を取るため事前の発掘調査が必要である。
3. 事前調査を実施すると仮定した場合、次のことが問題になる。経費や期間が膨大にかかる。高岡市教育委員会が担当する場合、他の調査予定があり、2～3年先になること。また民間の調査機間に委託する方法等もあるが、現状では調査員の確保が難しい。

この後、数回に亘る協議が持たれたが、擁壁工事の内容を工夫することにより、古墳群の保護に影響しない工法が採用されることになった。また未確認の埋蔵文化財が工事中に発見された場合の保護についても申し入れを行い、工事実施に至った。

埋蔵文化財の発見

平成7年9月4日午後、県高岡土木事務所より、市建設部土木維持課を介して、市教育委員会文化財課へ工事中の埋蔵文化財（の可能性のあるもの）発見の連絡が入った。文化財課の担当者が現地を確認したところ、一見して横穴墓と判るものであった。9月6日午前には、これらの3者で現地確認と協議を行った。またこの日の午後には、県埋蔵文化財センターの現地確認があり、指導を得た。

この発見は急傾斜地の擁壁を建設するため斜面の基盤層を掘削している時であり、この時点での工事箇所は、横穴墓の位置よりさらに奥まで進んでいた所であった。このため当面これ以上横穴墓が破壊される心配がなかったが、暫く後には擁壁の本体工事が開始される状況にあった。そこで発掘調査について、協議が持たれ、調査開始にいたった。この時点での横穴墓の状態は、墓前域と底部は破壊されていた。玄室は入り口側の上部が破壊されていた。玄室の天井部は、一部工事の影響により土が崩落していたが、天井部からの崩落は中央からのものであり、アーチ形の天井部の残りは良好なものであった。

2. 調査の経過

横穴墓の調査

調査のための準備等を終て、11月13日に発掘調査を開始した。先ず玄室内に堆積している土砂を取り出すことから開始した。この土砂は工事の影響により、外側から流入したものや天井の崩落によるものであり、古い堆積土はこれらの下から後日確認された。11月13日は主に資材の搬入にあて、14日から掘り下げた。15日は雨天のため休みとした。そして16日に至り一旦調査を中止した。これは付近で工事が続けられていて発掘調査に携わる者が危険であると判断したためである。

調査の再開

安全面の対策をなした後、12月5日より調査を再開した。2次的に堆積した土砂を取り除いた後、古い堆積土の除去となった。そして土器類等の遺物が出土し始めた。6日の午前には掘り下げは終わり、午後からは、スナップ写真的撮影と遺構や遺物の出土位置の略測を実施した。これは12月に入り雨天の日が多く、傘を差している部分から雨水が漏れ、いつ崩壊してもおかしくない状態となつたので、取り敢えずの記録をとったものである。7日には写真撮影と出土遺物の記録と取り上げを実施した。8日以降は遺構の実測を実施した。13日の記者発表、14日の遺跡の遠景写真撮影と続き、現地調査が終了した。

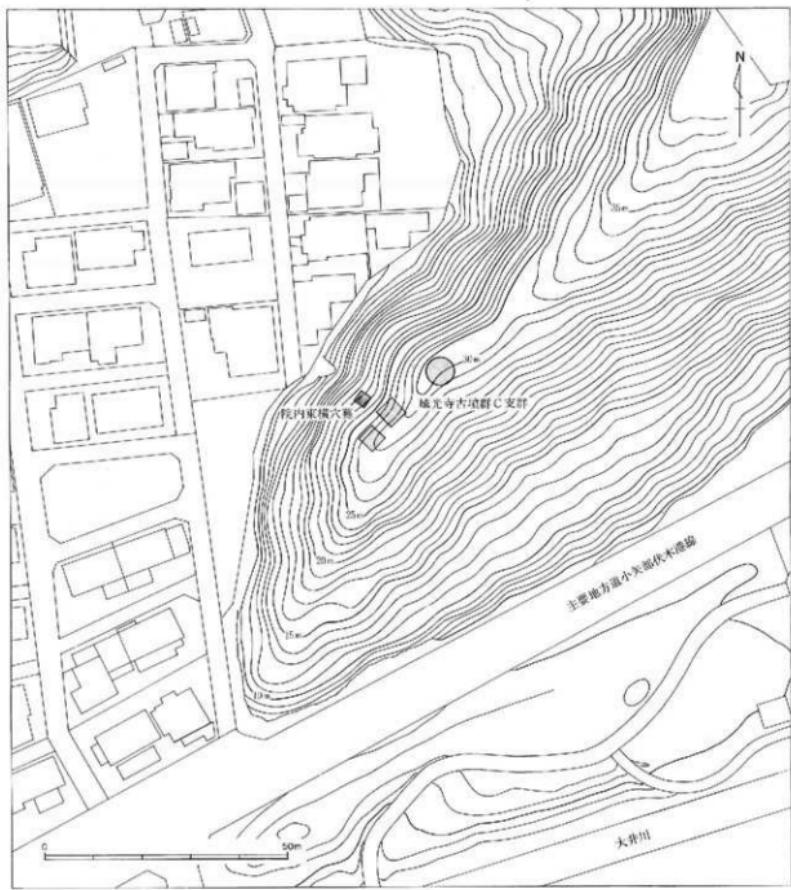
試掘調査

この工事計画では、さらに谷の奥側へ工事が実施されていく計画であった。この点についても協議が持たれ、平成8年度工事予定地分については、現地確認や必要な場合に試掘調査を実施することになった。この地区については、樹木が伐採された後、平成8年6月17日に市文化財課が現地踏査を実施した。この調査で須恵器片を2点採集したこともあり、試掘調査を実施することになった。

試掘調査は市文化財課の指導の下、山武考古学研究所が実施した。調査対象面積3,000m²で試掘坑を8本設定し、301m²の発掘を実施した。調査期間は平成8年10月17日から11月15日までである。試掘調査の結果、検出遺構、出土遺物ともなかった。

整理報告書作成作業

整理作業及び報告書作成は平成9年度事業として実施した。横穴墓の玄室内に堆積していた土砂は全て持

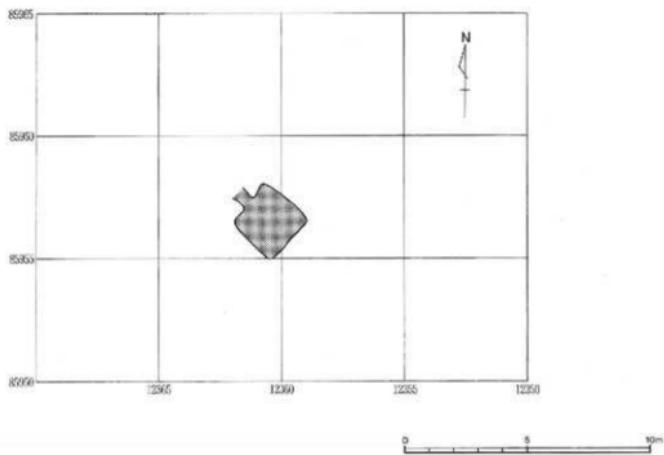
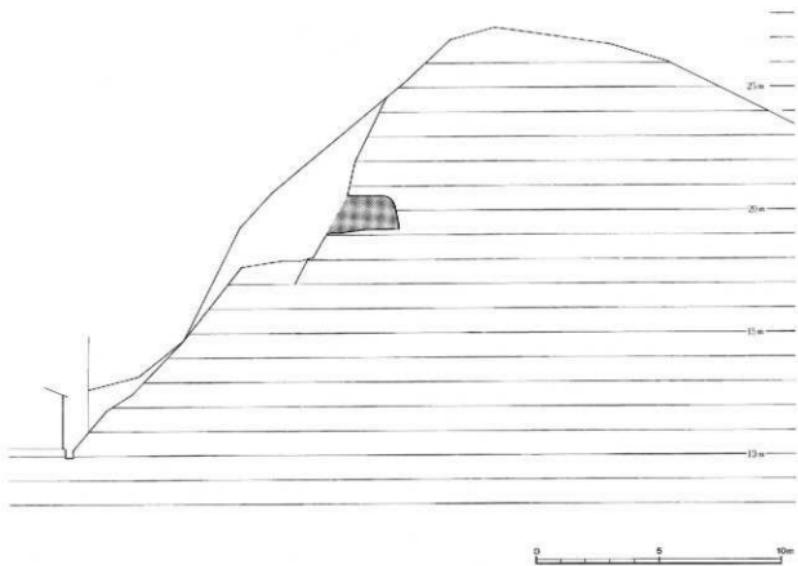


第7図 調査地区詳細図（1／1,000）

ち崩った。これは古い覆土、入口側部から入った新しい土、天井部からの崩落土とを分明にすることが、困難だったためである。これらはすべて水で洗浄した。この結果、金環やガラス小玉が確認された。

検出遺構と出土遺物

検出遺構は横穴墓1基である。出土遺物は横穴墓の玄室内から出土したもので、図示した須恵器高杯2点、直刀1点、刀子2点、金環1点、ガラス小玉112点と、刀子と思える小破片とガラス小玉の細片である。



第8図 構造位置図(1/200)

上段—断面図、下段—平面図

第2章 遺跡

第1節 遺構

横穴墓

立地

院内大谷の渓流を臨む、台地の北西側斜面に立地している。標高は約19~22mを計る。泥岩質の基盤層を掘り込んで構築している。稜線よりは約8m下であり、民家のある谷部の平坦地からは約10m上の地点である。主軸方向は北131.5度東である。

構造

両袖式の横穴墓。正方形に近い矩形平面の玄室に短い後道が付く形態である。残存全長は2.28mを計る。玄室床面は、長さ2.30m、幅は、奥壁側で2.20m、中央部で2.35m、入口側で2.25mを計る。胸部がやや張る正方形に近い矩形平面で、隅部はやや丸くなる。標高は、奥壁側で19.25m、入口側で19.05mを計り、前側へや傾斜している。奥壁は玄室内へ倒れ気味に立ち上がる。天井部はアーチ形である。床面からの高さは、奥壁側で1.24mを計る。奥壁側隅部近くより、左右の側壁、前壁を経て後道部の中央へ周溝が巡っている。幅約5cmで、深さ約3cmである。左前壁は側壁から鋭角に曲がっている。右前壁は側壁からほぼ直角に曲がっている。

後道部は工事のため大部分破壊されている。玄室側で僅かに確認できた。長さは73cmで、幅は50~60cmである。玄室から延びてきた周溝がここで合流する形となっている。

墓前域ないし前庭部とされている所は工事のため破壊されて不明である。

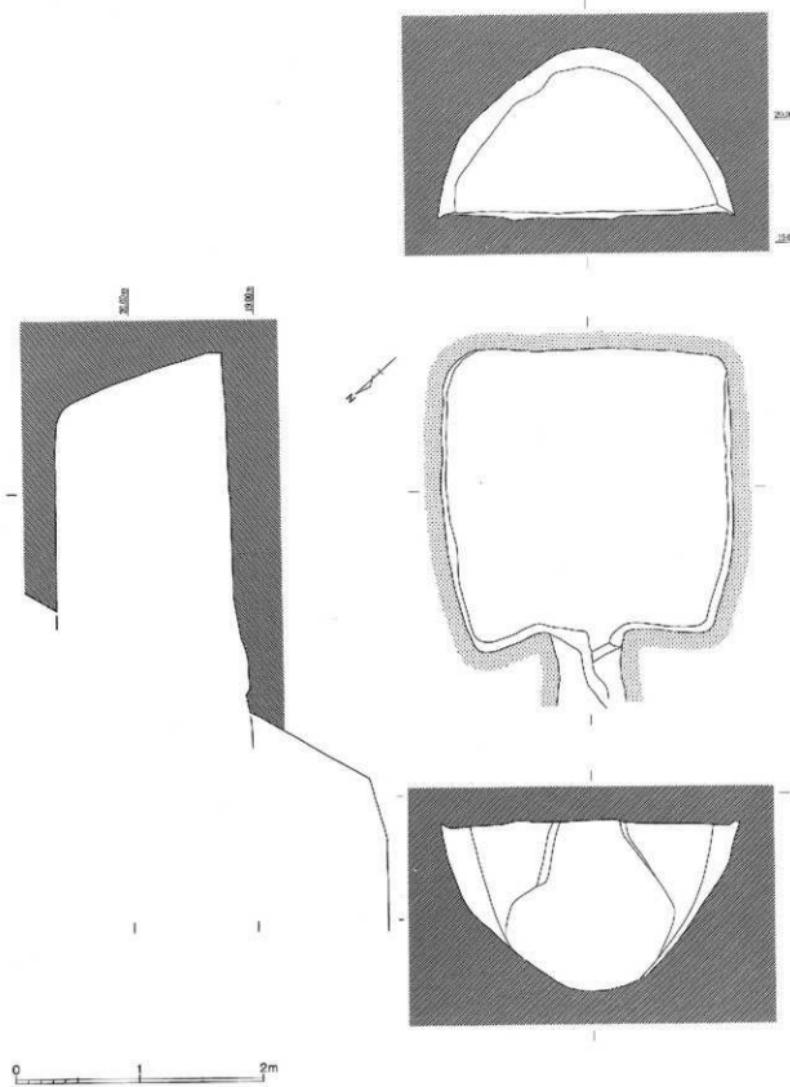
遺物

出土遺物は、須恵器高杯2点、直刀1点、刀子3点、金環1点、ガラス小玉112点である。すべて玄室内から出土したものである。この内、須恵器2点、直刀1点、刀子3点は、発掘調査時に原位置を把握して取り上げたものである。金環1点とガラス小玉112点は、玄室の土壌を持ち帰り、洗浄して取り出したものである。土壌洗浄では、これ以外に刀子と思われる小破片とガラス小玉の細片が出土している。

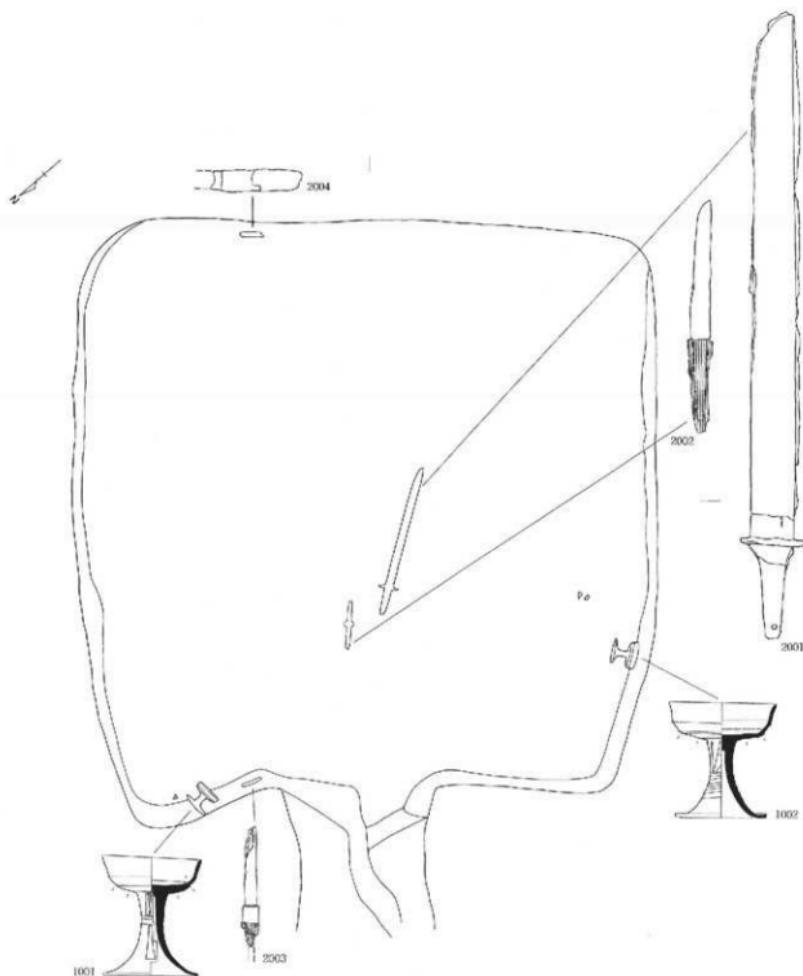
遺物の出土位置は、須恵器高杯(1001)と刀子(2003)が左前壁付近で、須恵器高杯(1002)が右側壁付近で、直刀(2001)と刀子(2002)が玄室中央部で、刀子(2004)が奥壁左寄りである。

人骨

人骨は出土していない。



第9図 造構全体図(1/40)



第10図 遺物出土位置図 (1/20)

第2節 遺物

1. 土器類

須恵器

土器類では須恵器高杯 2 点である。第11図で示した1001と1002である。2点とも長脚の高杯である。

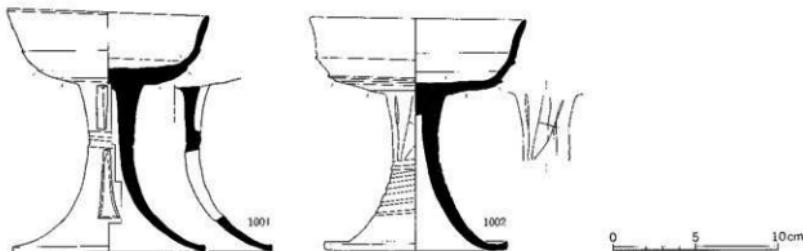
1001. 長脚で無蓋の形態の高杯である。口径12.0cm、器高14.6cmを計る。杯部はやや外傾して立ち上がる。口縁部と体部は後によって分けられる。体部と底部の境も稜及び段が付く。全体的に横ナデ調整されているが、底部は内面をナデ、外面をヘラ削りしている。脚部は円筒部は細長くなり、裾部は外下方へ大きく拡がっている。透かし孔は2段で2方向に付くものである。上段と下段とは2条の円線を廻らせることにより区分されている。上方の透かし孔は貫通していない、器壁の中位で止まっている。楔状にえぐりを入れたようなものである。下方の透かし孔は貫通しており、細く長い台形状のものである。脚端部が一部欠損しているが、ほぼ完形品である。

1002. 長脚で無蓋の形態の高杯である。口径12.9cm、器高14.2cmを計る。杯部はやや外反して立ち上がる。口縁部と体部は鋸い稜によって分けられる。体部と底部の境も鋸い稜が付く。全体的に横ナデ調整されているが、底部は内面をナデや指頭押圧し、外面をヘラ削りしている。脚部は円筒部は細長くなり、裾部は外下方へ大きく拡がっている。脚末端部は外面が上方へつまみ上げたようになっている。脚部の円筒部の装飾については、上方と下方に分けられている。上方にはヘラによる文様状のものが付く。下方には四線が螺旋状に6条程廻っている。完形品である。

2. 鉄製品

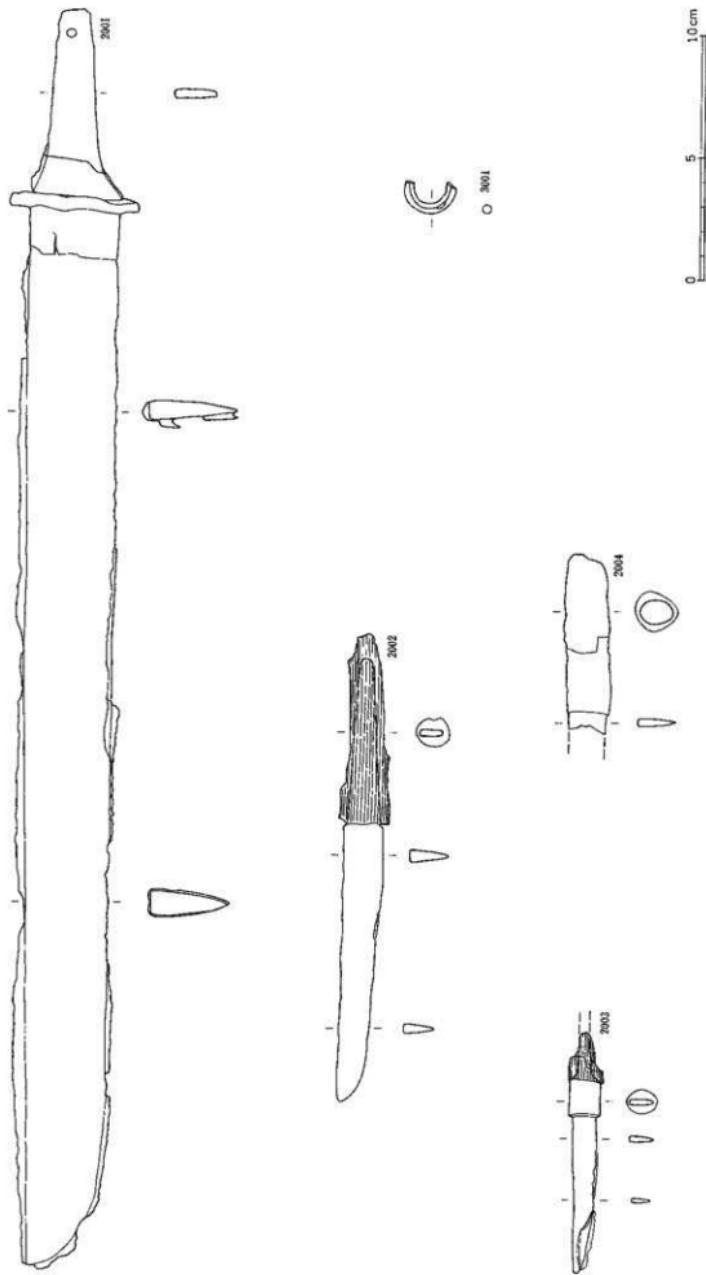
直刀

2001. 平様平造の直刀である。全長50.7cm、刀身長41.0cm、茎長9.7cmを計る。刀身の刃部が刃こぼれ状に若干欠損している以外は完存品である。フクラ切先で、刀身の先幅は約3.2cm、元幅は3.6cmである。図は



第11図 須恵器実測図 (1/3)

第12图 铁制品、铜制品实测图(1/2)



鉤と鍔に隠れて見えないが両区で小さく落としていると推定される。鍔は楕円形である。茎は偏りなく真っ直ぐにのびている。茎尻近くに目釘孔が付く。

刀子

2002。全長約18.0cm、刀身11.2cm、茎約6.8cmを計る。ほぼ完存している。平棟平造でフクラ切先である。柄の木質部が残存している。長さ7.7cmを計る。

2003。現存長9.8cmを計る。刀身はほぼ完存しているが、茎は刀身側が残存しているに過ぎない。平棟平造でフクラ切先である。把緒は断面が楕円形の円筒形である。長さ1.4cmを計る。柄には木質部が残存している。

2004。現存長7.4cmを計る。刀身は0.9cm残存している。茎は柄の木質部で覆われて確認できない。

3. 銅製品

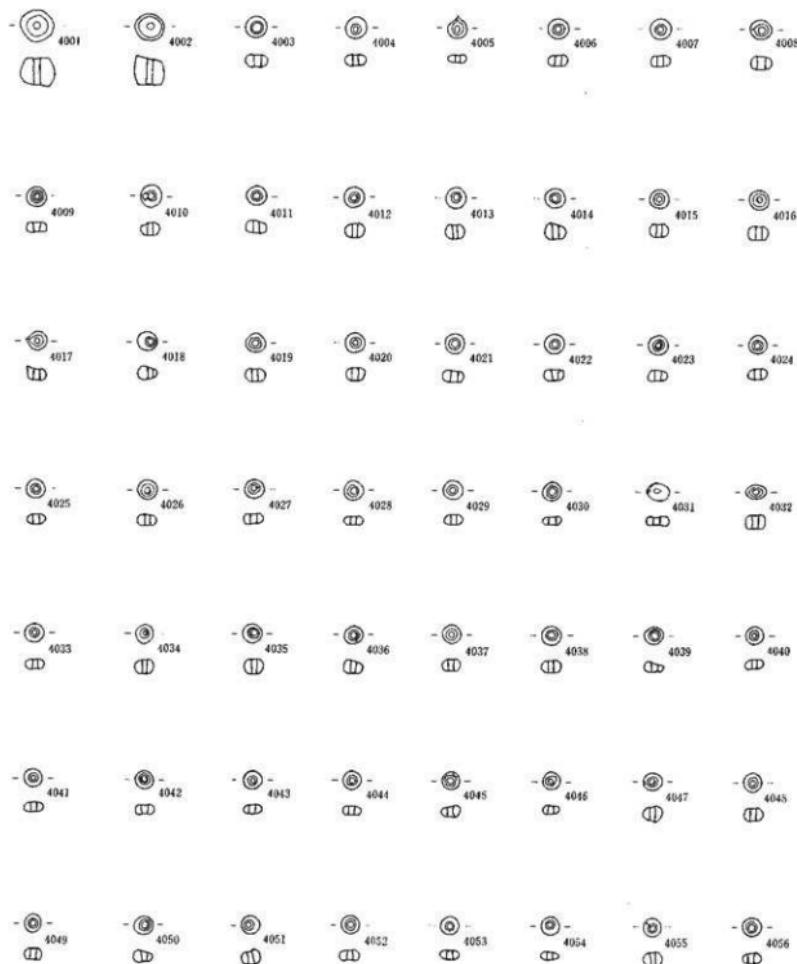
金環

3001。金環（耳環）の残欠である。約1／2残存している。径約2.1cm、太さ3.5～4.0mmを計る。地金は青銅である。表面を被っている金は大部分剥落している。

4. ガラス製品

ガラス小玉

4001～4112。ガラスの小玉112点である。大きさ及び形態より2つに区分できる。1つは大型品で俵形を呈するものである。4001・4002の2点である。もう一つは小型品で円形を呈するものである。4003～4112の110点である。色調からは、紺（群青）色、青色、緑色の3種類に区分できる。紺（群青）色のものは、4001～4102の102点と大部分を占めている。青色のものは、4103～4106の4点である。緑色のものは4107～4112の6点である。ガラス小玉のそれぞれの内容については、第1・2表に示した。長さ・幅・厚さの数字の単位は「mm」である。



0 5 cm

第13図 ガラス小玉実測図 [1] (実大)

- ◎ - ⑩ 4057	- ◎ - ⑩ 4058	- ◎ - ⑩ 4059	- ◎ - ⑩ 4060	- ◎ - ⑩ 4061	- ◎ - ⑩ 4062	- ◎ - ⑩ 4063	- ◎ - ⑩ 4064
- ◎ - ⑩ 4065	- ◎ - ⑩ 4066	- ◎ - ⑩ 4067	- ◎ - ⑩ 4068	- ◎ - ⑩ 4069	- ◎ - ⑩ 4070	- ◎ - ⑩ 4071	- ◎ - ⑩ 4072
- ◎ - ⑩ 4073	- ◎ - ⑩ 4074	- ◎ - ⑩ 4075	- ◎ - ⑩ 4076	- ◎ - ⑩ 4077	- ◎ - ⑩ 4078	- ◎ - ⑩ 4079	- ◎ - ⑩ 4080
- ◎ - ⑩ 4081	- ◎ - ⑩ 4082	- ◎ - ⑩ 4083	- ◎ - ⑩ 4084	- ◎ - ⑩ 4085	- ◎ - ⑩ 4086	- ◎ - ⑩ 4087	- ◎ - ⑩ 4088
- ◎ - ⑩ 4089	- ◎ - ⑩ 4090	- ◎ - ⑩ 4091	- ◎ - ⑩ 4092	- ◎ - ⑩ 4093	- ◎ - ⑩ 4094	- ◎ - ⑩ 4095	- ◎ - ⑩ 4096
- ◎ - ⑩ 4097	- ◎ - ⑩ 4098	- ◎ - ⑩ 4099	- ◎ - ⑩ 4100	- ◎ - ⑩ 4101	- ◎ - ⑩ 4102	- ◎ - ⑩ 4103	- ◎ - ⑩ 4104
- ◎ - ⑩ 4105	- ◎ - ⑩ 4106	- ◎ - ⑩ 4107	- ◎ - ⑩ 4108	- ◎ - ⑩ 4109	- ◎ - ⑩ 4110	◎ - ⑩ 4111	- ◎ - ⑩ 4112



第14図 ガラス小玉実測図 [2] (実大)

挿図番号	長さ	幅	厚さ	色調	図版	挿図番号	長さ	幅	厚さ	色調	図版
第13図-4001	6.4	6.5	6.0	紺	16-1	第13図-4031	3.8	4.7	2.0	紺	16-1
第13図-4002	5.5	6.0	6.0	紺	16-1	第13図-4032	4.2	3.0	3.1	紺	16-1
第13図-4003	4.8	4.7	2.9	紺	16-1	第13図-4033	3.9	4.1	2.2	紺	16-1
第13図-4004	4.3	4.5	2.3	紺	16-1	第13図-4034	4.1	3.8	3.0	紺	16-1
第13図-4005	4.5	4.0	1.8	紺	16-1	第13図-4035	4.1	3.9	3.1	紺	16-1
第13図-4006	4.0	4.3	2.5	紺	16-1	第13図-4036	3.9	4.0	3.0	紺	16-1
第13図-4007	4.3	4.0	2.5	紺	16-1	第13図-4037	4.0	3.9	2.5	紺	16-1
第13図-4008	4.0	4.3	2.5	紺	16-1	第13図-4038	3.9	4.0	2.5	紺	16-1
第13図-4009	4.2	4.0	2.0	紺	16-1	第13図-4039	3.9	4.0	2.5	紺	16-1
第13図-4010	4.1	4.1	2.9	紺	16-1	第13図-4040	4.0	3.9	2.0	紺	16-1
											-
第13図-4011	4.1	4.1	2.7	紺	16-1	第13図-4041	3.9	4.0	2.0	紺	16-1
第13図-4012	4.1	4.0	3.1	紺	16-1	第13図-4042	4.0	3.9	2.0	紺	16-1
第13図-4013	4.1	4.0	3.0	紺	16-1	第13図-4043	4.0	3.9	2.0	紺	16-1
第13図-4014	4.0	4.0	3.5	紺	16-1	第13図-4044	4.0	3.9	1.9	紺	16-1
第13図-4015	4.0	4.0	3.0	紺	16-1	第13図-4045	4.0	3.8	2.4	紺	16-1
第13図-4016	4.0	4.0	3.0	紺	16-1	第13図-4046	4.0	3.8	1.9	紺	16-1
第13図-4017	4.0	4.0	3.0	紺	16-1	第13図-4047	3.7	4.0	3.5	紺	16-1
第13図-4018	4.0	4.0	2.8	紺	16-1	第13図-4048	4.0	3.7	2.9	紺	16-1
第13図-4019	4.0	4.0	2.8	紺	16-1	第13図-4049	3.5	4.0	2.8	紺	16-1
第13図-4020	4.0	4.0	2.7	紺	16-1	第13図-4050	3.5	4.0	2.8	紺	16-1
											-
第13図-4021	4.0	4.0	2.5	紺	16-1	第13図-4051	3.9	3.9	3.0	紺	16-1
第13図-4022	4.0	4.0	2.5	紺	16-1	第13図-4052	3.9	3.9	2.2	紺	16-1
第13図-4023	4.0	4.0	2.3	紺	16-1	第13図-4053	3.9	3.9	2.0	紺	16-1
第13図-4024	4.0	4.0	2.3	紺	16-1	第13図-4054	3.9	3.9	2.0	紺	16-1
第13図-4025	4.0	4.0	2.2	紺	16-1	第13図-4055	3.9	3.8	2.9	紺	16-1
第13図-4026	4.0	4.0	2.2	紺	16-1	第13図-4056	3.9	3.8	2.2	紺	16-1
第13図-4027	4.0	4.0	2.1	紺	16-1	第14図-4057	3.9	3.8	2.1	紺	16-2
第13図-4028	4.0	4.0	2.0	紺	16-1	第14図-4058	3.9	3.8	2.0	紺	16-2
第13図-4029	4.0	4.0	2.0	紺	16-1	第14図-4059	3.8	3.9	2.0	紺	16-2
第13図-4030	4.0	4.0	1.9	紺	16-1	第14図-4060	3.8	3.8	2.5	紺	16-2

第1表 ガラス小玉一覧表【1】

掲図番号	長さ	幅	厚さ	色調	図版	掲図番号	長さ	幅	厚さ	色調	図版
第14図-4061	3.8	3.8	2.5	緑	16-2	第14図-4091	3.5	3.3	1.8	緑	16-2
第14図-4062	3.8	3.8	2.3	緑	16-2	第14図-4092	3.2	3.5	1.9	緑	16-2
第14図-4063	3.8	3.8	2.3	緑	16-2	第14図-4093	3.5	3.1	2.1	緑	16-2
第14図-4064	3.8	3.8	2.2	緑	16-2	第14図-4094	3.5	3.1	2.0	緑	16-2
第14図-4065	3.9	3.6	2.0	緑	16-2	第14図-4095	3.5	3.1	2.0	緑	16-2
第14図-4066	3.8	3.7	3.0	緑	16-2	第14図-4096	3.4	3.3	2.3	緑	16-2
第14図-4067	3.8	3.7	2.5	緑	16-2	第14図-4097	3.3	3.3	2.3	緑	16-2
第14図-4068	3.8	3.7	2.4	緑	16-2	第14図-4098	3.3	3.3	2.0	緑	16-2
第14図-4069	3.8	3.7	2.3	緑	16-2	第14図-4099	3.2	3.3	1.7	緑	16-2
第14図-4070	3.7	3.8	2.1	緑	16-2	第14図-4100	3.2	3.0	1.7	緑	16-2
第14図-4071	3.9	3.5	2.0	緑	16-2	第14図-4101	3.0	3.1	2.1	緑	16-2
第14図-4072	3.9	3.5	1.9	緑	16-2	第14図-4102	3.0	3.0	1.9	緑	16-2
第14図-4073	3.8	3.6	2.1	緑	16-2	第14図-4103	3.9	3.9	2.1	青	16-2
第14図-4074	3.5	3.8	2.8	緑	16-2	第14図-4104	3.5	3.4	1.8	青	16-2
第14図-4075	3.8	3.5	2.7	緑	16-2	第14図-4105	3.5	3.1	1.9	青	16-2
第14図-4076	3.7	3.7	2.5	緑	16-2	第14図-4106	2.9	2.7	1.9	青	16-2
第14図-4077	3.7	3.7	2.1	緑	16-2	第14図-4107	4.8	4.8	3.8	緑	16-2
第14図-4078	3.7	3.7	2.0	緑	16-2	第14図-4108	4.3	4.1	3.1	緑	16-2
第14図-4079	3.7	3.7	2.0	緑	16-2	第14図-4109	4.0	4.1	2.5	緑	16-2
第14図-4080	3.6	3.7	2.6	緑	16-2	第14図-4110	4.0	4.0	2.0	緑	16-2
第14図-4081	3.5	3.5	2.2	緑	16-2	第14図-4111	3.9	3.4	2.0	緑	16-2
第14図-4082	3.5	3.5	2.0	緑	16-2	第14図-4112	3.5	3.7	2.2	緑	16-2
第14図-4083	3.5	3.5	1.5	緑	16-2						
第14図-4084	3.8	3.2	2.0	緑	16-2						
第14図-4085	3.8	3.1	1.8	緑	16-2						
第14図-4086	3.7	3.4	2.3	緑	16-2						
第14図-4087	3.5	3.3	2.5	緑	16-2						
第14図-4088	3.5	3.3	2.2	緑	16-2						
第14図-4089	3.2	3.5	2.1	緑	16-2						
第14図-4090	3.5	3.3	2.0	緑	16-2						

第2表 ガラス小玉一覧表 [2]

第3章 総括

今回の調査は横穴墓1基である。

工事中のいわゆる不時発見の遺跡である。院内の谷の東側に位置していることより、「院内東横穴墓」と命名した。一般的には横穴墓は群集するので、これ1基ではなく他に横穴墓が存在していた可能性が高いと考えている。

工事のため葬道部は大半破壊され、玄室も入口側上部が削除されていた。しかし玄室の床面近くの壁は、葬道部まで残存していたので、玄室の規模が判明したことは幸いであった。

人骨は出土しなかったが、副葬品とした遺物が出土した。須恵器高杯2点、直刀1点、刀子3点、金環1点、ガラス小玉112点である。金環とガラス小玉は出土位置を明確にできないが、その他のものは原位置を示した状態で出土した可能性が強い。遺骸が横穴墓の主軸と平行に葬られた場合、その脇に直刀と刀子があり、入口側の両脇に高杯などが配置された状態が想定される。

高杯以外の杯が出土しなかったこともあります、年代を明確にできないが、6世紀後半から7世紀初頭、特に6世紀末頃を中心とする年代を考えておきたい。

高岡市域では、これまでのところ3群の横穴墓群が知られている。南西側より北東側へ、江道横穴墓群、頭川城ヶ平横穴墓群、二上横穴墓群である。当院内東横穴墓はこれよりさらに北東側に位置する横穴墓群であり、その所在範囲が拡がったことになる。また概ね他の横穴墓群と同時期の所産と言える。

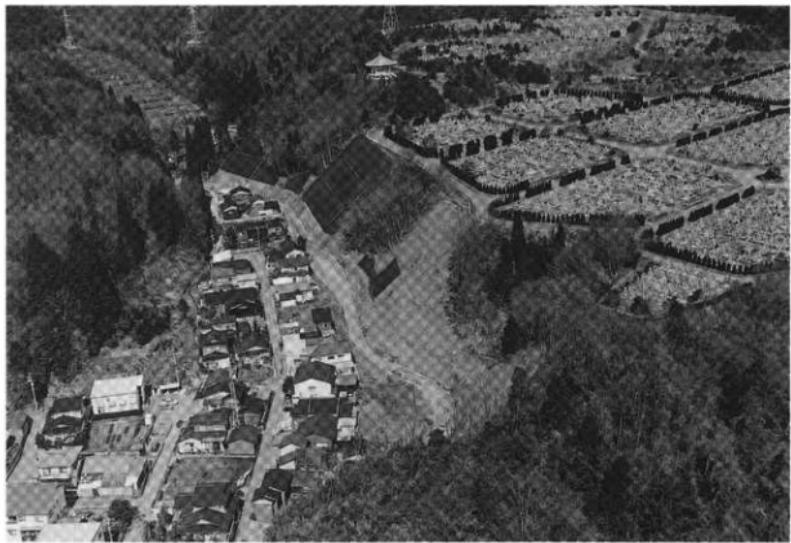
参考文献

- 青木一彦他 1996 「射水平野の遺跡－古代の北陸道を探る－」 『大境』第18号 富山考古学会
- 池上 信 1980 「横穴墓」 『考古学ライブラリー6』 ニュー・サイエンス社
- 池上 信 1991 「東国の横穴式石室と横穴墓」 著全谷
- 逸見 譲他 1983 「富山県高岡市頭川城ヶ横穴墓群第1次緊急発掘調査概報」 高岡市教育委員会
- 逸見 譲他 1984 「富山県高岡市源川城ヶ平横穴墓群第2次発掘調査報告」 高岡市教育委員会
- 大野 究 1989 「越方横穴群」 水見市教育委員会
- 小高寺男他 1996 「山宿横穴墓群発掘調査報告」 君津都市考古資料刊行会
- 樋村友延他 1988 「小串出横穴墓群」 福島県いわき市
- 木下 良 1980 「富山県歴史の遺産報告書－北陸街道－」 富山県教育委員会
- 木下 良 1995 「古代の交通体系」 『岩波講座日本通史』第5巻 岩波書店
- 木下 良編 1996 「古代を考える－古代道路」 吉川弘文館
- 京田良忠他(弘源輝寺合調査団編) 1994 「越中二上山と国泰寺」 桂香房
- 小林健太郎 1978 「北陸道」 『古代日本の交通路II』 大明堂
- 坂井誠一他 1974 「角川日本地名大辞典16—富山県」 角川書店
- 坂詠秀一他 1985 「武藏・駿ヶ谷横穴墓群」 立正大学文学部考古学研究室
- 高岡 総他 1988 「二上山研究会研究紀要昭和62年度」 富山県立二上工業高等学校二上山研究会
- 橋康太郎他 1978 「守山小学校百年史」 高岡市守山小学校
- 田辺昭三 1966 「陶邑古窯址群I」 平安学園考古学クラブ
- 田辺昭三 1981 「須恵器大成」 角川書店
- 豊島 耕他 1978 「二上の歴史」 二上郷土誌編纂委員会
- 中原 齐他 1987 「大塔山横穴墓群」 鳥取県教育文化財団
- 西井龍儀 1983 「二上山周辺の古墳」 『昭和57年度高岡市埋蔵文化財調査概報』 高岡市教育委員会
- 藤田富士夫 1983 「日本の古代遺跡13富山」 保育社
- 古岡英明 1972 「古墳時代」 『富山県史考古編』 富山県
- 古岡英明 1972 「矢田上野古墳群」 『富山県史考古編』 富山県
- 古岡英明他 1991 「たかおか－歴史との出会い－」 高岡市市政100年記念誌編集委員会
- 山田邦和 1998 「須恵器生家の研究」 学生社
- 和田一郎 1969 「高岡市史」上巻 青林書院新社

圖 版



1. 遺跡遠景、現況（北西）



2. 遺跡遠景、現況（南）



1. 遺跡遠景、発見時
(西)



2. 遺跡遠景、発見時
(西)



3. 遺跡遠景、発見時
(南)

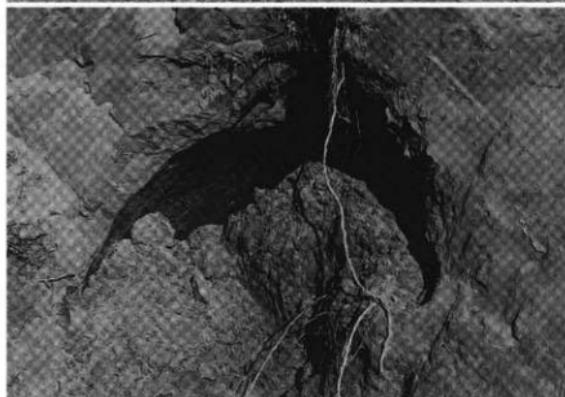
図版三 遺跡



1. 遺跡前での協議、
発見時（北東）



2. 横穴墓全景、発見時
(北西)



3. 横穴墓全景、発見時
(西)



1. 遺跡全景、
調査開始時（南）



2. 開発風景、
調査開始時（南西）



3. 調査風景、
調査開始時（北）



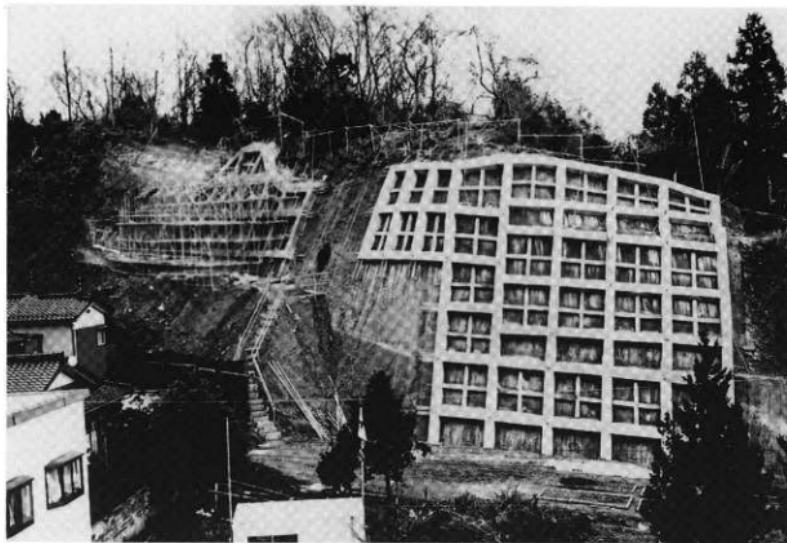
1. 遺跡全景。
調査再開時（南西）



2. 調査風景（北西）



3. 調査風景（北西）



1. 遺跡遠景、調査終了時（西）



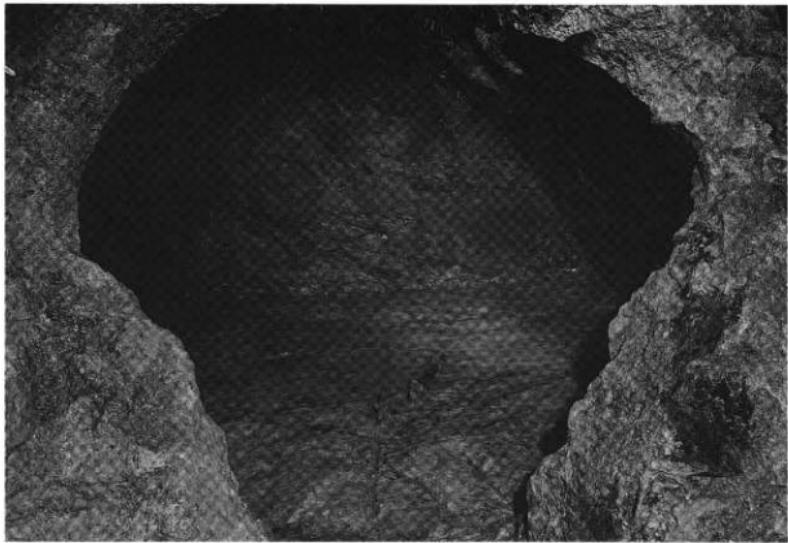
2. 遺跡遠景、調査終了時（北西）



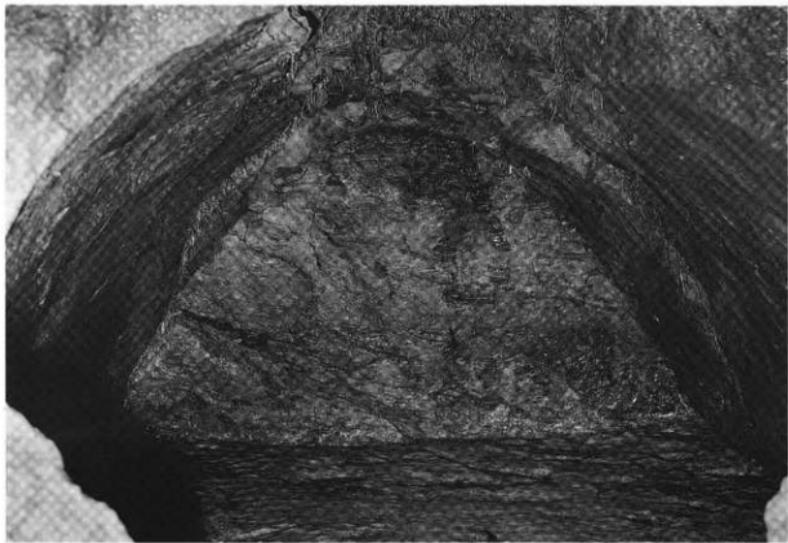
1. 橫穴墓全景（北西）



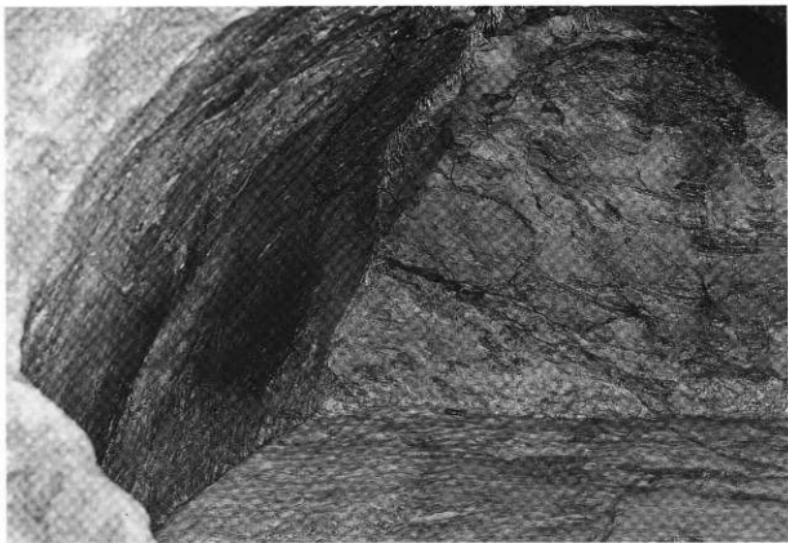
2. 橫穴墓全景（北）



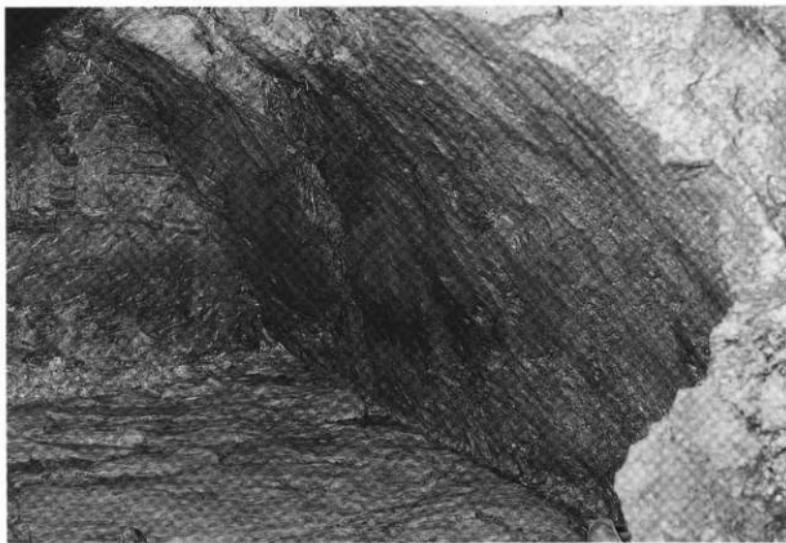
1. 橫穴墓近景（北西）



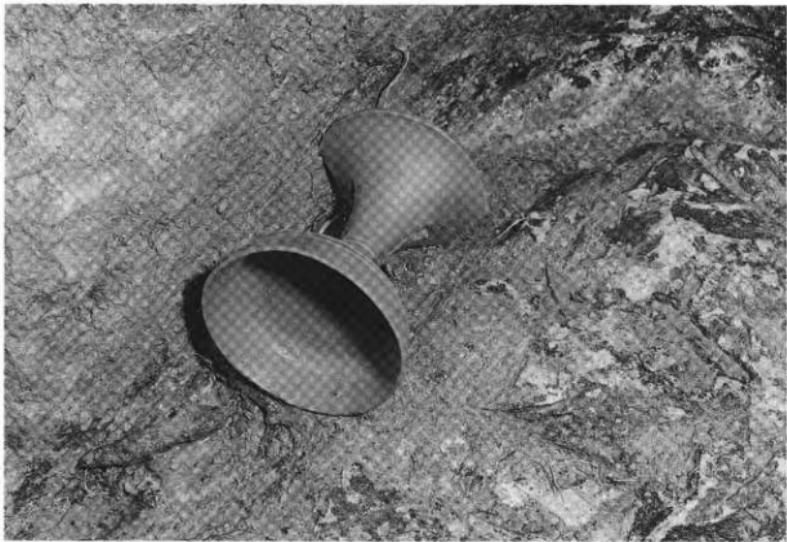
2. 橫穴墓近景（北西）



1. 玄室左壁側近景（北西）



2. 玄室右壁側近景（北西）



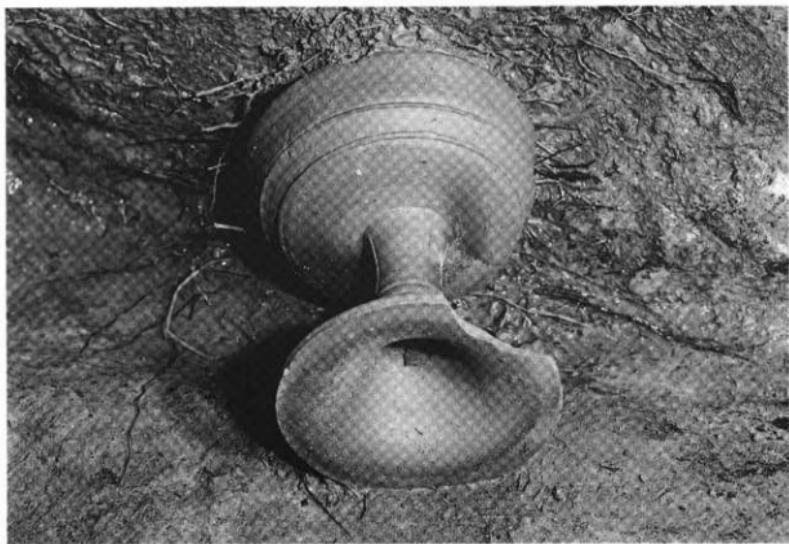
1. 禱惠器高杯出土狀態（南）



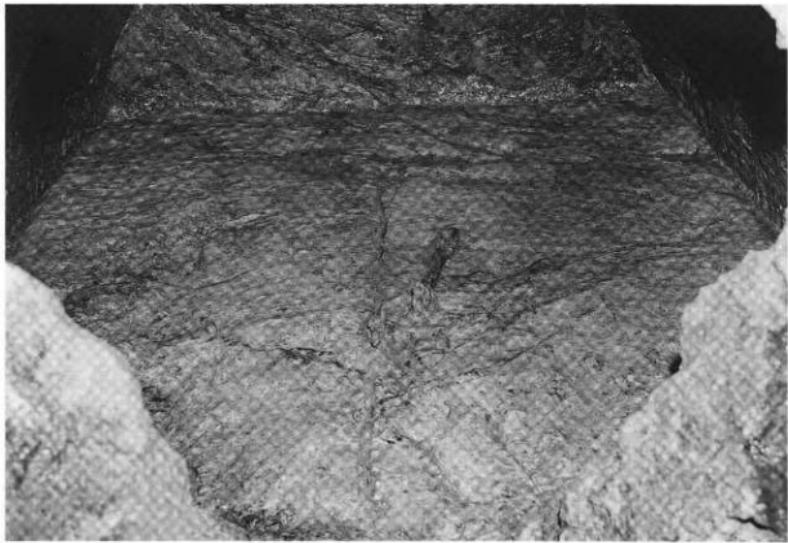
2. 禱惠器高杯出土狀態（南）



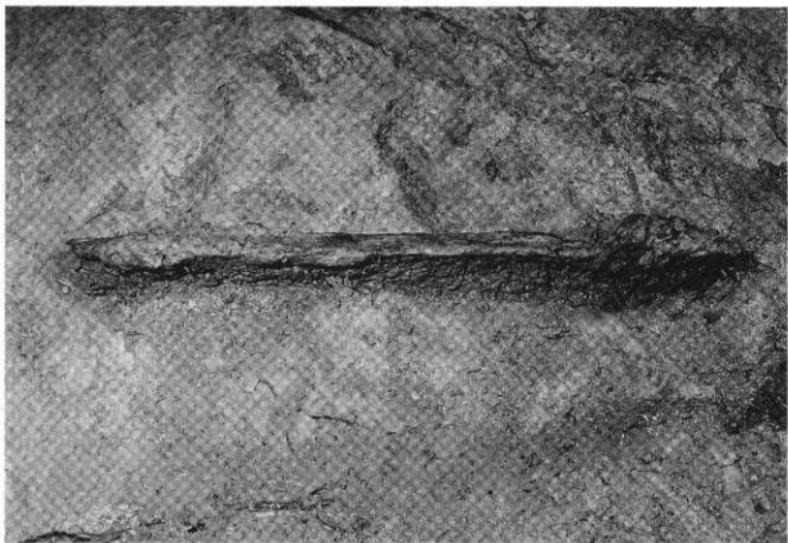
1. 須惠器高杯出土状態（東）



2. 須恵器高杯出土状態（北東）



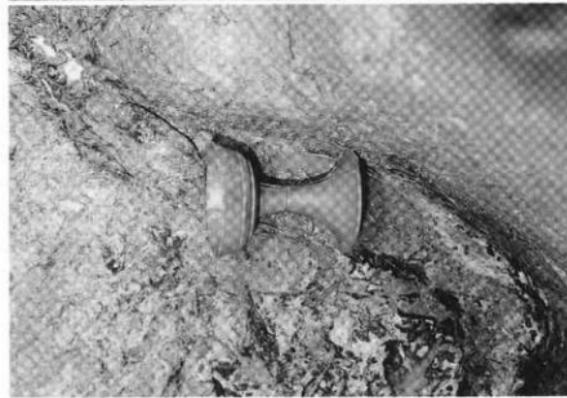
1. 直刀出土狀態（北西）



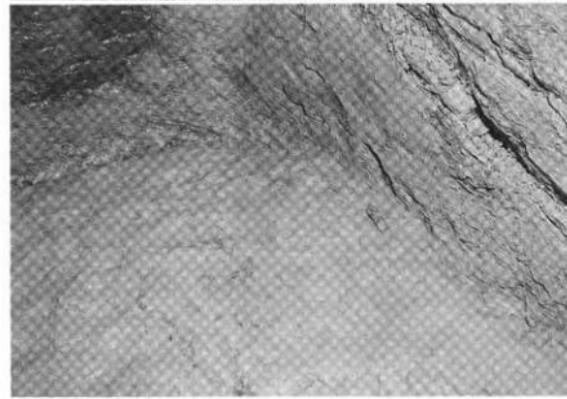
2. 直刀出土狀態（北東）



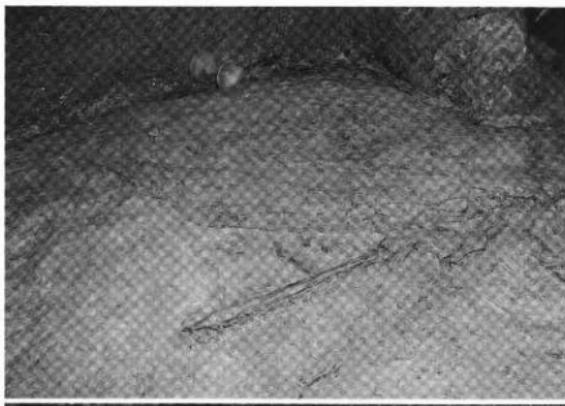
1. 須惠器高杯、刀子出土
状態（南）



2. 須恵器高杯、刀子出土
状態（西）



3. 刀子出土状態（西）



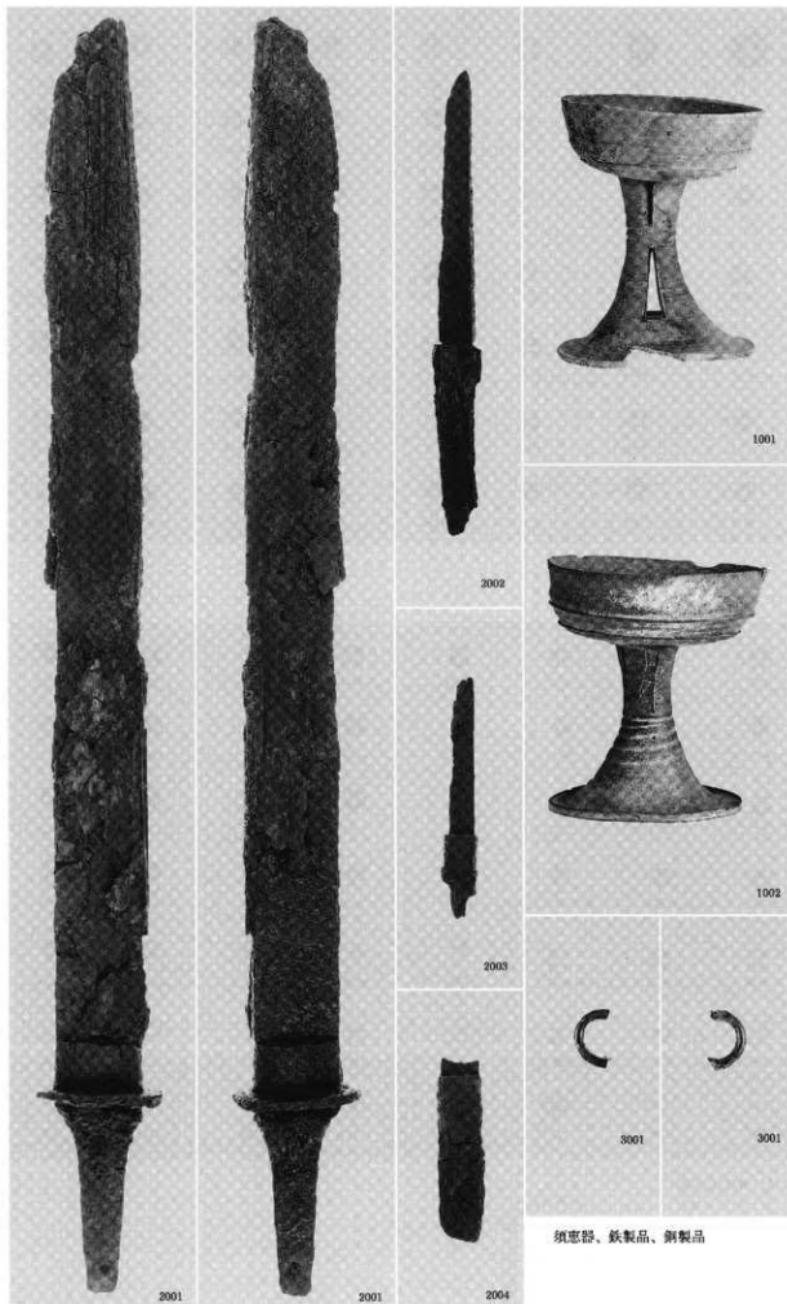
1. 直刀、刀子、須恵器
高杯出土状態（東）



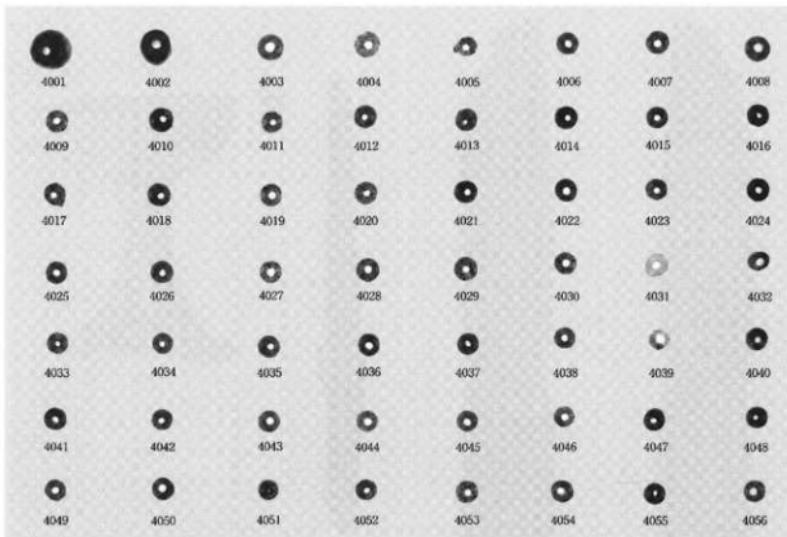
2. 直刀、刀子、須恵器
高杯出土状態（北東）



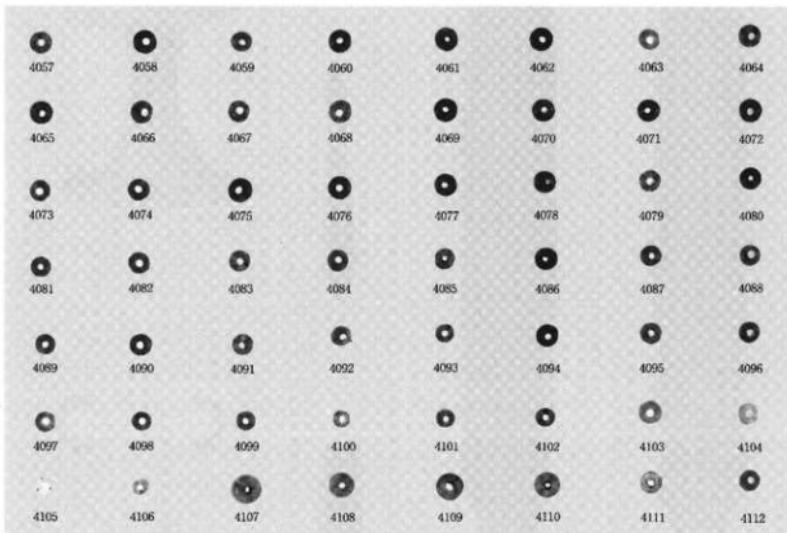
3. 須恵器高杯出土状態
(東)



須惠器、鐵製品、銅製品



1. ガラス小玉



2. ガラス小玉

報告書抄録

ふりがな	いんないひがしよこあなば					
書名	院内東横穴墓					
副書名	平成7年度小久保川水系院内大谷砂防改良工事に伴う調査					
巻次						
シリーズ名	高岡市埋蔵文化財調査報告					
シリーズ番号	第2冊					
編集者名	山口辰一					
編集機関	高岡市教育委員会					
所在地	〒933-0057 富山県高岡市広小路7番50号 TEL. 0766-20-1453					
発行年月日	西暦 1998年3月31日					
ふりがな 所収遺跡	所在地 市町村	コード 遺跡番号	北 緯 東 経	測量期間	調査面積	調査原因
院内東 横穴墓	富山県高岡市 二上院内	016202	36度 46分 31秒	137度 1分 41秒	950904 951222	6m ² 砂防改良 工事
所収遺跡名	種 別	主な時代	主 な 遺 槽	主 な 遺 物	特 記 事 項	
院内東 横穴墓	横穴墓	飛鳥時代	横穴墓	須恵器高杯 直刀、刀子、金環 ガラス小玉	人骨は確認されて いない 工事中の発見	

高岡市埋蔵文化財調査報告第2冊

院内東横穴墓調査報告

発行者 高岡市教育委員会

富山県高岡市広小路7番50号

1998年3月31日

印刷所 キクラ印刷株式会社

富山県高岡市篠野内島710-3
